



図 20.12 青色母斑の病理組織像



図 20.13① 太田母斑 (nevus of Ota)

## 1. 青色母斑<sup>せいしよく</sup> blue nevus

### Essence

- 真皮にメラノサイトが密に増殖した結果生じる扁平～やや隆起した青色結節。
- 多くは幼児期までに出現し，四肢，頭部や殿部に好発。

### 症状

日本では成人の約3%で見られる。通常1 cm以下の青色ないし黒色調の硬い小結節を形成する。扁平なものや腫瘤状になるものも存在する（図 20.11）。一般に単発性であり，発育が緩徐である。四肢や頭部，顔面のほか，背部，殿部などに好発する。直径1 cmを越え，隆起の強い不整形局面を形成することがあり，細胞増殖型青色母斑（cellular blue nevus）と呼ばれる。

### 病理所見・診断

真皮中層を中心に，メラニン産生能の高い真皮メラノサイト（dermal melanocyte：青色母斑細胞）の腫瘍性増殖が認められる（図 20.12）。細胞増殖型青色母斑では，メラニン産生能が低く Schwann 細胞に類似した紡錘形細胞を混じる。悪性黒色腫との鑑別を要する。

### 治療・予後

切除する場合は病巣すべてを取り残しのないように行う。悪性化する場合もあるため経過を観察する。

## 2. 太田母斑 nevus of Ota ★

同義語：眼上顎褐青色母斑（nevus fuscoceruleus ophthalmomaxillaris）

### Essence

- 黄色人種の乳児あるいは思春期女子に好発し，三叉神経第1,2枝領域に片側性の淡青褐色斑と眼球メラノーシスを生じる。
- 真皮メラノサイトの増殖とメラニンの基底層への沈着による。
- 悪性化は認めないが，自然消退もない。レーザー療法が著効する。